季刊

foggy

フォギー

2011
No.000

創刊準備号

読切り小説

「マーチ」
「マイホームパパ」
「舌の根／口述筆記」
「モラルサッカーブルーズ」

連載小説

「愚　族」
「Paper sniper」
「幻争日記」

読切り漫画

「完全犯罪クラブ　クライムボーイよしお」

読切り小説１　舌の根／口述筆記　01

　部屋の外から微かに雨音が聴こえてくる。

　悟はソファの肘掛けに頭を乗せた格好で、しばらくその音に耳を澄ませていた。
連日のパーティーのおかげで、頭の中はスナック菓子に犯された舌のように鈍く、雨音にまざって隣の部屋から聴こえてくる音楽は、壁に高音域を吸収され、不規則な心音にしか聴こえない。
もう夜は明けたはずだが部屋の中は薄暗い。

　ゆっくりと目蓋を閉じ、じわじわと開くと、視界に透明のザラメのような粒が拡がる。それは眼球のわずかな動きですばやく上下した。悟はそれを眼球の表面に棲むバクテリアか、何かそれに似たものだろうと考えていた。
「シャキッとしたいんだ俺は！」と、悟は傍らに転がっていた発泡酒の空き缶を投げ捨てる。それが３メートル先で寝っころがっていた太った男の頭にコツとぶつかった。思わず「やべっ！」と悟が声を上げると、太った男が何回かゆっくりと寝返りをうった後で、のっそりと立ち上がった。
「うー……あれ？　ここどこだっけ。は！　先生のご自宅兼仕事場ですか？」
「誰にしゃべってンだよ」
立ち上がった男が録朗である事がわかり安心した悟は、ソファから起き上がり彼に近付くと、その汗ばんで湿った左手首を掴み、グイと自分の顔に近付けた。腕時計の文字盤を確認するために、近付けた手首をさらにねじる。「いで」と録朗は顔をしかめたが、たっぷりついた脂肪のせいで表情の変化は乏しい。
「５時か、もう始発出てンだろ、帰ろうぜ」
「え……でも先生が昼にみんなでバーベキューやろうって……」たかがバーベキューで泣きそうな声を出す録朗。
「外、雨降ってんだから中止だよ」
眼の裏側あたりのもやもやとした不快感でイラついていた悟は、少し強めに録朗の肩をパンパンと叩き、玄関へ行くようにうながす。そして脱ぎ捨てられている大量の靴の中から、雨の中を歩いても靴下が濡れないような靴を探す。あった。それは先生の自宅に来る途中、泥酔して自分の吐いたゲロの上に体育座りして動かなくなった半村という男のものだった。ちょっとかかとの部分にゲロがひっかかっているが、外を歩いている内に落ちるだろう。
サイズが少し大きかったので、腰をおろし靴紐をしっかりと結び直す。
「悟、それ半村さんのだよ」
「わかってるよ。俺の靴だと雨水がスゲー浸水してくんだよ」
悟は立ち上がりドアを開ける。雨の匂いがかすかに漂ってくる。
「やばいよ」体をゆすりながら録朗が悟の肩をつかむ。並んで立つと悟より頭ひとつ分高い。
「半村さーん、ちっと靴借りるわ。これでいいだろ？」囁くような小さい声でそう言うと、悟はニヤッと顔を歪めた。
「大体動かなくなった半村をここまで引きずってきたのは誰だっけ？　俺だろ？　じゃ先行くよん」と言って悟は外へ出て行った。
　録朗は部屋の奥を何度かふり返り「うー」とうなったあとで悟の後を追った。

　悟と録朗が帰った後も『先生』と呼ばれている男の家には、まだ数人の男女が残ってダラダラと飲んだり、バーベキューにそなえて仮眠をとったりしていた。
「俺はさ、このまま腐りたくないよ」
　ガリガリに痩せた男が、芝居がかった口調でつぶやいた。
「腐れよ。いや、もうハンムラは腐ってんな」レイノルズは、半村がうつぶせになっているソファの背を、軽くつま先で蹴りながらそう言うと、昨夜のパーティーで食べた寿司の入っていたプラスチックのトレーからガリを指でつまみ、インド人がカレーを食べる時の仕草をまねて口に運んだ。
「こんな旨いもの、なんでみんな残しちまうんだ？」といった意味の言葉を、英語でファックを三回ぐらい使って、誰に言うでもなく叫ぶ。その時、フリクションの『カガヤキ』が大音量で部屋をゆさぶった。ターンテーブルの前には、先生がまるでマネキンの様に突っ立っている。
「センセイ、ちょっと音でかいよ。センセイ？　センセーイ！」とレイノルズが叫びながら、クルクルと回りだす。どうやらさっきトイレで何かキメてきたらしい。

　昼前に雨がやんだので、庭でのろのろとバーベキューが始まった。
酔っぱらったレイノルズが、食べごろに焼き上がった肉や野菜を、片っ端から庭の外に放り投げ、一人で大笑いしていた。
　皆が完全にしらけきった頃、先生が豚をまるごと一頭台車に乗せて運んで来た。先生は台車に勢いをつけると、そのままコンロに激突させた。豚は台車から落ちると庭の外の車道まで転がり、たまたま通りがかったベンツに跳ね飛ばされた。「ブタちゃんカワイソー！」とレイノルズが奇声を発した。

　昼過ぎ、録朗からしつこく誘われた悟は、また先生の家に行った。
　家の前まで来ると、哀れな豚が50回目の衝突事故をおこしているところだった。庭からは先生とレイノルズの笑い声が聴こえる。二人がどんな悪ふざけをしていたかは容易に想像できた。道路わきに転がった豚を見ていると、悟は無性にビールが飲みたくなった。
　庭まで行くと、先生とレイノルズ以外には誰も残っていなかった。皆、この二人の遊びに嫌気がさして帰ったのだろうと悟は推測した。
「ブタちゃんカワイソー！」と言いながらレイノルズが缶ビールを持ってきて、悟と録朗に手渡した。悟は「次はお前がやれよ」と言いながらレイノルズに向かって足を蹴り上げたが、ダンスのステップの様な動きでかわされた。
　悟は結局そのまま朝までダラダラと飲み続け、始発で帰った。

　翌日、先生から「打ち合わせしたい」と連絡を受けた悟は、連日の飲み過ぎで最悪の気分だったが、体をひきずるようにして家を出た。電車に乗って下高井戸駅で降り、駅のトイレで軽く嘔吐した後、煙草を吸いながら携帯電話でイチに電話をかけた。
「今、下高井戸の駅」まだ口の中が酸っぱい。
「誰が？」イチの声は、布を一枚間にはさんだようにくぐもっている。それは子供の頃、黒電話で東北に住む祖母と話した時の事を悟に思い出させた。音に距離を感じるのだ。
「誰がって俺がだよ、今からお前のとこ行っていいか？」
「いいけど、今わたしはいないわよ？　それでもよければ」
「……いないって、じゃあ俺は今、誰と話してるんだよ」
「何？　酔ってる？　いつかみたいにトイレに吐かないでよ？」
「いや、俺それ記憶にないんだよね、申し訳ない。鍵はいつものとこ？」
「えーと、うん。いつものとこ」
「ン……じゃ、切りますね」悟は、こみ上げてきた吐き気をこらえながら言った。
「あっ、ちょっとまって、仕事七時には終わるから、もしそれぐらいまでいるんだったら…」
「いや、ちょっとシャワー浴びたいだけだからさ、それにこの後仕事だし」
「そう……じゃあ、ちゃんと鍵しめてってね」
「あーい了解」なんか俺ってヒモみたいだな、でもちゃんと仕事してるぞ！　と悟は思った。

　イチの住むアパートの前まで来ると、悟は煙草を一本吸った。
　ブルー・チアーの曲を、思い出せる限り口笛で吹くと、煙草の吸い殻を落とし、あきらめたようにアパートへと入っていった。
　アパートは二階建てで、イチの部屋は二階の左端だった。悟は玄関ドアの前に立つと鍵を探した。しかし、いつもの場所に鍵はなかった。それから五分程まわりを探したが結局見つからず、あきらめた悟はアパートを出た。近くに住んでいる友達のところへ行こうかと考えたが、時間が中途半端だったので、街道沿いのファミレスへ向かった。

　そのファミレスは、イチのアパートから歩いて十五分程のところにあり、店内の照明が弱く全体的に薄暗いのと、店員にかわいい女の子が多いので、よく先生との打ち合わせに使っていた。
　顔なじみの店員にかるくあいさつをしながら店内に入ると、先生は先に到着していて、奥の窓際の席で今日発売のチャンピオンを読んでいた。
「先生」と悟が声をかけると、先生は読んでいたチャンピオンをテーブルに置き、吸っていた煙草を灰皿でもみ消しながら、悟にむかって微笑んだ。そしてメニューを取って悟に手渡す。悟は店員を呼び、コーヒーとポテトフライを頼んだ。そして灰皿の中の吸い殻を眺めながら、先生の第一声を待った。
「一応何個かできたの持って来たよ」
　先生は、店員がポテトフライを運んでくるのと同時にそう言うと、ソファに置いた迷彩柄のデイパックから、キャンパスのノートを取り出し、テーブルの上に置いた。ノートにはサインペンで『ササキ・マコト　14』と書いてある。悟はポテトフライの皿をテーブルの脇にどけると、ノートを手に取り、半分くらいパラパラとページをとばし、緑色の付箋が貼ってあるところで止めると、そこから無言で読み始めた。
「う～ん、全体的に良くないというか何というか……えぇ？　『女より男が大事、と思いたい』って、これパクリじゃないすか！」と悟が言うと、先生はもたれかかっていたソファから少し身を浮かせ、目を丸くしながら「え？　パクリ？　誰の？」と言った。
「太宰ですよ……」そう言うと悟は少し苦笑いを浮かべた。先生は煙草の煙に顔をしかめながら「ダザイ？　って誰？　俺は悟みたいに文学青年じゃなかったから知らねーわ」と言った。
「太宰をずっとスルーしてきたんですか？　今まで。いずれにせよこれでよくわかりましたよ。あなたのセンスはすっかり錆ついちまったようですね。俺が憧れたササキ・マコトはどこいっちまったんだろーなー」悟はあきれ顔でそう言

うと、ポテトを口にくわえた。
「今も変わらずここにいるけどな」先生は煙草の煙を吐き出しそう言った。

読切り小説１　舌の根／口述筆記　04

『先生』イコール『ササキ・マコト』は詩人である。
　十代後半で始めたバンド『オーバーレヴェルイディオット』は、ライブハウスを中心に活動していた。
　ササキ・マコトはリードボーカルとギターを担当し、バンド内の中心的人物だった。他のメンバーから「先生！」と呼びかけられていたので、（理由は不明）自然とファンからも『先生』と呼ばれるようになっていった。
　自主制作でアルバムを一枚作ると、それが大手レコード会社の目にとまり、バンド結成から二年足らずでメジャーデビューすることになった。
　最初の仕事が、いきなりゴールデンタイム生放送の歌番組で、バンドはデビューシングルの『ハクチ』を演奏する予定だったが、この曲を「プロデューサーにいじくりまわされてまったくの別物」と、気に入っていなかったササキ・マコトは、本番での演奏中に、発作的に自分の右目を親指で突いて潰してしまったのだった。
　テレビの画面は『しばらくお待ちください』に切り替わり、ササキ・マコトはスタジオから病院へと搬送された。
　この一件で一般からも注目されるようになり、尖ったバンドとカテゴライズされた『オーバーレヴェルイディオット』はテレビにこそ出られなくなったが、ライブの観客動員やシングルの売り上げを、じわじわと伸ばしていった。
　その後数枚のアルバムをリリースした後、バンドは解散。理由は『音楽性の一致』というふざけたものだったが、実際は金銭トラブルだった。
 その後、ササキ・マコトは今まで書きためていた未発表の詩を出版。これが何故か小ヒットし、その半年後、調子に乗って２冊目を出版した。これが今度は中ヒットくらいになり、じゃあもう１冊作っちゃおう！　と盛り上がり、３冊目の制作がスタートしたのだが、以前の２冊でバンド時代に書きためた詩を使いきってしまったので、今度の本は全て新しく書き下ろす必要があった。ササキ・マコト自身も最初は「なんのこたぁない」と書き始めたのだが、その詩には致命的に『何か』が欠けていた。
『オーバーレヴェルイディオット』時代からの熱心なファンだった悟は、ライブに通う内にメンバーと親しくなり、ローディーの真似事をするようになった。バンド内ではササキ・マコトと妙に馬が合い、解散後のソロでのライブも手伝う内に、いつの間にか友達のような関係になっていた。
　そんな訳で、以前のライブを手伝うという行為が、今は詩を書く仕事を手伝う（というか急かす）行為へとシフトし、それはれっきとした仕事として認められ、ササキ・マコトの個人事務所から、毎月給料も出ている。

「『僕はタイクツな子供だった、どこかにひそんだ忍者に怯えていた、カレーライスが好きだった』……なんですかこれ？」ノートに書かれた最後の一行を読み終えると、悟はあきれた顔でそう言った。
「そんなに言うなら悟が書いてくれよ……『先生』イコール『ササキ・マコト』イコール『悟』」先生は煙草の煙を吐き出し、顔を左右に振りながらそう呟いた。
　その日から悟は、先生のゴーストライターとなった。

読切り小説１　舌の根／口述筆記　05

「人生とは、ババ抜きをしながらのイス取りゲームである」
　先生との打ち合わせから数日後、一人で入った立ち飲み屋『天狗の下駄』で、悟が色々なワンカップ酒を試し飲みしていると、隣で飲んでいた男が、突然そう話しかけてきた。
　先生のゴーストライターを引き受けたものの、作業はまったくはかどらずイラついていたので、無視することにした。それでも男はおかまいなしに、意味不明なことをしゃべりつづけた。
　店の床に置かれたラジカセからロバート・ジョンソンが流れると、男はふっと顔上げ「お前は今、悪魔と取り引きしているんだ」と呟いた。
　その後の悟の記憶はぷっつりと途切れていて、つぎに気が付いた時には、隣で飲んでいた奇妙な男と、公園のすべり台の下で激しく殴りあっていた。
　悟は殴りあいのような喧嘩は、ほとんどというかまったくした事がなかった。自分はそういった事とは無縁の人間だと思っていた。しかし今、目の前で鼻血を出しながらつかみかかってくる男は、そんな悟の奥深く眠らせていた暴力性を、無遠慮にぐいぐいとひきだし始めていた。
　悟も男と同様に鼻血を垂らしながら、右の拳を男がいるであろう方向に突き出す。真夜中であるという事と、疲労とアルコールのせいで、その攻撃は精度を欠いている。
 何発目かの悟の右ストレートが、ほぼラリアットのような形で男の胸にぶつかり、二人はそのまま倒れこんだ。
　二人ともそれからしばらく動かなかった。男と悟の肺に酸素を送り込む音だけが公園を支配していた。口の中がカラカラに乾いていて、悟は何度か咳をした。
　近くを走る車の音が聞こえてくると、感覚がだんだんまともになってきているようだと悟は思った。
「巻島」
　突然女の声がした。声がしたほうを見ると、その姿は、公園の手前の道をゆっくりと右折している車のヘッドライトで、シルエットになっている。悟は前にレンタルビデオで見た『未知との遭遇』を思い出した。車が通りすぎるのと合わせるように、女はこちらに向かって歩き出した。そしてもう一度「巻島」と言った。
　悟の隣であおむけに倒れていた男はゆっくりと立ち上がり、勢いよく口の中の血を吐き出すと「見つけましたよ所長、こいつです」と悟をあごでしゃくった。悟もゆっくりと立ち上がり、巻島と呼ばれた男と所長と呼ばれた女を交互に見た。
　女は、女というよりはまだ少女に見える。歳は12～13歳頃か。日本人形の様に髪が長く、腰までのびていて、前髪は眼のあたりで雑にそろえてあった。
「あんた」と少女が言った。悟は話かけられた事に気付かず、しばらくぼぅっとしていた。
「あんた」ともう一度少女が悟のほうに一歩近寄りながら言ったので、はじめて自分が話かけられていることに気付いた。
「えっ？　俺」悟はそう言ったつもりだったが、喉がカラカラだったので単なる息切れのようにしか響かなかった。
　少女はそんな事はまったく気にしていない様子で「あんたが悟？……こんなやつに詩なんか書けるの？」と言うと、くるっと体を回転させ、公園の出口に向けてスタスタと歩き出した。巻島と呼ばれた男も、ややふらつきながらそれにつづく。
「ちょっと待てよ……」と悟が声にならない声でそう言うと、「ついてきて、すぐそこが事務所だから」と少女が言った。悟はあまりいい予感はしなかったが、ここは少女について行くことに決めた。思考能力はほぼゼロに近かったが、悟が『詩』に関わっている事を何故少女が知っているのか、それを確かめておく必要があった。
　少女は巻島と悟を率いて、公園を出てすぐの交差点を横断し、50メートル程歩き『菊花』というさびれた食堂の前でとまった。真夜中であるにもかかわらず、店内には灯りが灯っていて、かすかにテレビの音も聴こえる。引戸を開けて中に入ると、カウンターに初老の男が座って、退屈そうにテレビショッピングを見ていた。こちらに背を向けたままボソッと「今日はもうおしまいだよ…」と面倒くさそうに言った。
　少女が「依頼人は来てる？」と言うと、くるっと振り向き「お嬢！　お帰りなさいまし」とさっきの３倍くらいの声を出し、目を輝かせた。
　カウンターの中に入り冷蔵庫を開け、瓶ビールを取り出しながら「まだいらっしゃってませんが、さっき道がわかり

にくいってお電話がありましたんで、おっつけ着く頃かと…」と言った。
「そう、初めて来る人は迷うかもね……ハイジさん、悪いんだけどこいつらの傷、手当してやってくれない？　適当でいいから」と言うと、少女はカウンターのイスに座り、目の前に置かれた瓶ビールをコップについで、一気に飲み干した。
　悟は状況がはっきりするまで様子を見ているつもりだったが、思わず「お前未成年だろ？」とつっこんでしまった。
　カウンターの奥から、ハイジと呼ばれた初老の男の笑い声が聴こえた。
「お若いの、あんたお嬢の事何も知らないね？」ハイジは古ぼけた救急箱を抱えて、悟に近づきながらそう言った。
「さ、突っ立ってないで座って」悟は言われるがまま、近くにあった丸イスを引き寄せて座った。ハイジは悟に口の中を見せるよう促す。
「うん、顔は鼻血が出てるだけだね。口の中は……切れてるねこりゃ、口の中はマキロン塗っても平気かな？」と言いながら、いきなり口の中にマキロンを噴射してきたので、悟はイスから飛び上がって激しくむせた。隣から巻島の高笑いが聴こえた。
「適当すぎるだろそれ」と言うと、巻島は悟の背中をさすった。悟は巻島の手を振り払い、咳きこみながら「ふざけんなよ……おっさん」と言うのがやっとだった。その時、車の甲高いエンジン音が聴こえたかと思うと、店の前で急停車した。半開きになっていた引戸から、きつい香水の匂いが漂ってくる。
「緑川探偵事務所ってこちら？」店の外から女の声がした。声に気付いた少女（？）はコップを置くと、まだ咳きこんでいる悟を押しのけ、店の外に出た。そして「どうも、所長の緑川です。依頼人の佐々木祥子さんですね？」と言った。悟はその名前を聴いてさらに咳きこんだ。店の外に出て女を見る。「ドロシーさん、なんでここに？」喉がカラカラな上に（マキロンで多少潤ったが）咳きこんだ後だったので、悟の声はほとんど相手に伝わっていないようだった。佐々木祥子は少し眉間にしわをよせて「鼻血が出るほど混乱してるみたいね。今から説明するわ」と言った。
　佐々木祥子はササキ・マコトの妻で、個人事務所の社長でもある。元々はササキ・マコトのバンドのおっかけで、ドロシーというしょーもない名前は、その頃ついたアダ名だった。

読切り小説１　舌の根／口述筆記　06

「慣れって恐ろしい。贅沢に慣れ、不平等に慣れ、虐殺に慣れる！」イチはテレビのニュース番組を凝視しながら、ボソッとつぶやいた。
　隣で寝ころがって『包丁人味平』を読んでいた悟は、今日はやれそうにないなと考えていた。しかも煙草が残り１本だった。
「……んじゃあ帰るわ」悟は立ち上がり、ジーンズのポケットを軽く叩いた後、そう言った。イチはまだテレビを見ている。
「帰る？　巨峰忘れないでね」テレビから目を離さずに言う。
「あぁ、叔母さんから送ってきたやつだろ？　サンキュー……」
　悟は冷蔵庫の上のビニール袋を手に取る。
「お前明日は？　仕事？」
「そうだけど？」
「ふーん……じゃあね」
「うん。おやすみ」
　悟はアパートを後にした。

　翌日、先生のソロとは別のユニット『永訣』と『東京山椒魚』のリハーサルが、南青山のスタジオで行われた。
　リハの休憩時間を使って、近くの喫茶店『サヰコ』で３冊目の本の打ち合わせをする事になった。
「俺は次の本を百万部売る自身があるよ」先生は鎖骨の辺りまで伸びた髪を邪魔臭そうにかきあげ、そう言った。
「……百万部っすか、すごいっすね」悟は、さっきからほとんど機械的に相づちを打っていた。
　昨日、佐々木祥子（ドロシー）から聞かされた話が頭を支配していて、心ここにあらずの状態であった。
　ふと足下を見ると、半村のスニーカーを履いている事に気付き、悟は思わず吹き出した。「やっべ思いっっっきり忘れてた、ていうかすでに俺のもんと化してた」
「え？　どうしたの悟」と先生が聞く。
「いや、この間先生の家で飲んだ時、あのー……半村さんがベロンベロンになって、吐いた時あったじゃないすか」
「あぁ、あん時か、結構最近だよな？」
「そうっすね、そん時半村さんのスニーカー履いて帰ったんですよ。それを今、完全に自分のものとして履いてるのに気付いて、思わず笑っちゃいました」
「あぁ、それでか！　あん時、お前と録朗が帰った後、半村が俺の靴がねぇー、見あたらねぇーって、すげえうるさくて、それにレイノルズが切れて大変だったんだぞ？」
「うげ、マジすか？」
「なんかその靴、すげえいいやつらしいぞ？　ナイキとどっかのコラボだっつって」
「言われてみれば確かに良さげですね……サイズも俺にフィットしてるし」
「いや、『フィットしてるし』じゃなくて返してやれよ、すげえ顔で探してたから」
「すげえ顔って？」
「ん？　レイノルズに顔面ひざ蹴りいれられて、鼻血ボタボタたらしながら」
「うわ、なんか返すの怖くなってきたな……」
「そういや、さっきも聞いたけどさぁ、悟も顔ボコられたみたいになってるけど……それどうしたの？」
「え？　あぁ、だからこれはさっきも言ったとおり、昨日ちょっと修羅場がありまして……」
悟は昨日の事を思い出した。同時に口の中に鉄の味がよみがえってくる。

　昨晩、ドロシーはさびれた食堂『菊花（緑川探偵事務所一階）』で、依頼内容について話始めた。
「電話でも簡単に話したけど、まず、あたしの夫を探してほしいの」そう言って手にした封筒から写真を取り出し、緑川に渡した。
　悟は「いなくなってねぇし！」とつっこみたかったが、ここでしゃべるとまたむせてしまいそうだったので、黙ることにした。
「この人……最初にお電話でうかがった時もびっくりしたんですけど……あの、ササキ・マコトですよね？」
「そうよ、ご存知？」
「ご存知もなにも有名ですから」
「そいつをねぇ、探し出したら、消しちゃってほしいのよ」
「えぇ～！」今度は黙っていることができずに悟は叫んだ、そしてまたむせた。
「ど……どういうことですか？　ドロシーさん」悟がかすれた声で言った。
「生かしておくより、殺したほうが金になんのよ」
「それでこの人がササキ・マコトの未発表としての詩を書く？」と言って、緑川が悟を指差す。
「ぜんっっっぜん意味わかんないっす！　急になに言ってんすか！」パニック状態の悟にハイジが水のはいったコップを差し出す。「まあこれでも飲んで落ち着けや」悟はそれを一気に飲み干した。すると口の中に今まで味わったことのない味覚の波が広がった。ハイジが手にしていたのはお酢の瓶だった。悟は店の床に這いつくばって、またもやむせた。むせながら、頭のなかでは渾身の右ストレートで、ハイジをカウンターの奥までぶっ飛ばす、というイメージを描いていた。
　咳がおさまるまでたっぷり３分はかかった。悟は右の拳を固く握りしめると、ハイジがいるであろう方向に向けて顔を上げた。しかしそこにはドロシーの顔面が、悟の視野を全てうめつくすほどの距離で立ちはだかっていた。
「ちょっと、アンタ話聞いてる？」「ギャ！」悟は思わず後ずさった。
「ギャ！　じゃないわよ、いい？　アンタがこの作戦の鍵なんだからね？　しくじったらアンタも殺るわよ」
　お酢を全部吐き出したせいか、ドロシーのつけているキツイ香水の匂いが悟の鼻をついた。お酢の匂いのほうがまだマシだなと思い、悟は苦笑した。
「なにニヤついてんのよ……気持ち悪い顔」そう言ってドロシーは顔をしかめると、手にもっていたクリアファイルからコピー用紙を１枚取り出し、悟に渡した。
「そこに全部書いてあるから、アンタはその通りに行動して！」
　渡された紙には、先生を呼び出す場所や、呼び出す時の悟のセリフ、先生暗殺後に警察から事情聴取を受けた場合の模範解答、等がびっしりと書き込まれていた。悟はその文面から病的（あるいは電波的）なものを強く感じた。
　ドロシーについては以前から少し異様なものを感じてはいたが、世の中には色んな人がいるからな……と深く考えてはいなかった。しかしここまでいっちゃっているとは！　悟は、停止寸前の脳みそを補助電源でなんとか回転させ考えた。
　う～ん、う～ん……ここは素直に向こうの言う通りにしよう！　そう決めた悟は、『まだ頭が混乱してますですはい風』をよそおい立ち上がった。
「とりあえず俺はこの場所に先生呼びだせばいいんスね？」
「そうよ、いい子ね」ドロシーはニヤリと笑った。

「全力疾走で人ごみに突っ込んでって、手にした金属バットで溢れかえったゴミ屑な連中の頭をかち割るような音だ、沼さん」と先生は言った。
　沼と呼ばれた男は、先生がソロ活動を始めてからずっと、バックバンドのギターを担当している。先生が一番信頼をおいている人物である。
「意味わかんねぇ～注文だな、相変わらず……」沼は、足下のエフェクターをしばらくガチャガチャと足で踏んでから、「こんな感……」と言い終わらないうちにギターを鳴らした。アンプがビリビリと振動して、上に乗っていたペットボトルが床に落ちた。

「俺は俺自身の純度を高める必要がある」
　先生はマイクに向かってボソっとつぶやいたが、沼のフィードバックに掻き消され、誰にも聴こえてはいなかった。
　それから１時間程たってから、バンド全員での練習が始まった。
　ドラムは早稲田大学出身のヤマガタという男で、悟と同い年だった。他のメンバーからは『ハカセ』というベタなアダ名を付けられていた。
　ハカセが「わ〜ん、つ〜う、すり〜、ふぉ〜」とカウントを入れると、やや食い気味でベースのチョビ（女、三十代）がメジャーコードのリフを弾き始めた。鉄骨が折れる時のようなフィードバックを出していた沼がリフの断片を紡ぎ始めると、先生が国営放送のアナウンサーみたいな口調で歌い始めた。

　悟は奥歯を舌で舐めながら、行列に並んで順番を待っていた。
　紺色の作業服を着た連中が、悟の前後に並んでいる。悟自身も同じ紺色の作業服を着ていた。時々咳払いや、鼻をすする音が聴こえる。
　行列は、四人が横並びで一組になっていた。悟のいる位置から５メートル程先に鉄の扉があり、一定の間隔で扉が開き、四人ずつ中に入っていっているようだった。悟は扉から七組目の右から二番目だった。後ろに続く列はかなり後方まで続いており、右に曲がる所から後ろは見えなくなっていた。どれほどの人数が順番を待っているのかは解らない。
　その建物の中は、病院に感じが似ていた。しかしやけに暗い。それは窓がひとつもついていないせいだった。何故か今の時間が昼過ぎだということが悟にはわかっていて、それが頭にあるせいか、建物の中の暗さが余計気になった。黄色く変色した蛍光灯が一本、天井にしがみつくといった感じでついているだけで、他に発光するものはない。
　悟の着ている作業服には、胸ポケットの上のところに『棘貫』とオレンジ色の刺繍が入っていた。とげぬき？　とげぬき地蔵かな？　と悟は思った。
　何となく頭に手をやると、悟の頭は坊主になっていた。頭をジャリジャリとさすりながらまわりを見てみると、他の連中も全員坊主頭だった。薄暗いなか目を凝らしてみると、列には色々な年代の人間が混在していた。
　ここは一体どこなんだ？　さっきまでは病院かと思っていたが、今は刑務所のような気もする。悟が今いる場所について推理していると「おい、棘貫」と隣の男が話しかけてきた。男は悟より少し身長が低く、四十代後半くらいで、右目のまぶたが開ききっていなかった。「なぁ棘貫、今日はお前、なんだろうな？」男はそう言って下品に笑った。悟はよく意味が解らないまま「なんだろうなって何がですか？」と聞き返した。「お前……またかよ、リセットされちゃってんの？」あきれた様子で男が言う。「まぁ、そういうヤツ結構多いらしいけどな……でもお前みたいに何回もっていうのは、少しヤバいんじゃねーかなー……つっても俺が何言ったところで、ちんぷんかんぷんだろうけどさ、うわっ！
　今俺『ちんぷんかんぷん』って言った？」悟がうなずく。「多分、今までの人生で初めて口にしたよ、それもこれも棘貫、お前が『ちんぷんかんぷん』なおかげだよ」男はまた下品に笑いながら、悟の背中をバシバシと叩いた。
　いつの間にか悟は、鉄の扉の前まで来ていた。隣の男が扉を開くとまわりの景色が公園に変わった。悟はそこでようやく、ここが夢の入り口であることを思い出した。悟は十歳くらいの少年になっていて、同年代の少年数人とサッカーをしていた。誰かが蹴ったボールが、公園の奥にある草むらに飛び込んだ。取りに行こうとした奴を悟はあわてて止める。俺が取りに行くよ。草むらには昨日殺した友達が隠してある。

　コツコツコツ、という乾いた音で悟は目を覚ました。ドアをノックしている音らしい。音の響きかたから考えると、隣の部屋をノックしているようだ。
　ノックは断続的に続き、たまに「……さん？」と、その部屋の住人に呼びかけている。若干寝ぼけていた悟は「オレんとこか？」と思い、玄関ドアの覗き穴をのぞいてみたが、人の姿は見えなかった。かわりにレンズの左端に黒塗りの車が見えた。
　どうやらお隣さんの客らしいと確認した悟は、二度寝しようとフラフラと布団に戻った。その時、布団の敷いてある部屋のアルミサッシの向こう側を、人影が通りすぎるのが見えた。
　悟の住んでいる四畳半のクソボロアパート（悟の部屋は一階）は、裏手に猫の額にも満たない庭がある。少しの沈黙の後、隣の部屋のアルミサッシのガラスをノックする音が聴こえてきた。
　お隣さんへの訪問者が裏庭へまわったらしい。ノックの音もさっきより性急になった。悟はまだ少しボーっとしていたが、「ちっと普通じゃないな、お隣さん追い込みかけられてんのか？」と思った。庭に誰かいる状態で二度寝する気にもならなかったので、立ったまま腹をポリポリと掻いていた。
　その後もしばらくノックの音や、訪問者が庭の雑草を踏みしめる音が続いた。
　悟は、部屋の壁に沿って積み重ねられたマンガの山の一番上から、コボちゃんを手に取りパラパラとページを繰った。そのままコボちゃんに悟が集中しだした頃、またノックの音が聴こえた。今までにない明瞭さで。それは悟の部屋のドアをノックする音だった。
　悟はコボちゃんを左手に持ったまま、また玄関ドアの覗き穴をのぞいた。
　今度は人が見えた。後ろの車よりはるかに深い黒のスーツを着た男が立っていた。髪はアニメみたいな金髪だった。ドアを開けるのがためらわれたので、その場で「どちらさん？」と悟は言った。
　一拍おいて黒スーツの男が言った。「お休みのところすいません。お隣にお届け物なんですが、今留守みたいで……ご迷惑かと思いますが、よろしかったら預かって頂けませんか？　ナマモノなんで冷蔵庫にいれておいて頂けると……」風貌とはギャップのある丁寧な物言いに、少し気のゆるんだ悟は「いいすよ」と言いながら玄関ドアを開けた。そしてその後すぐそれが大失敗であることを理解した。黒スーツの男が手にしていたのは『ナマモノ』ではなく『ヒカリモノ』ジャックナイフだった。
「先生の居場所を吐きな、ボウズ」
　黒スーツの男は、さっきまで悟が掻いていた腹にナイフを突きつけた。ナイフの尖端はTシャツを音もなく貫通し、皮膚からコンマ５ミリくらいのところでピタリと止まった。悟は「へ？」と情けない声を出すことしかできなかった。その時、外の道路に人影が見えた。ウグイス色の作業服を着たおっさんが、自転車に乗って、悟の部屋の前を通りすぎようとしていた。黒スーツの男が乗って来たと思われる黒い車をよける時、ちらっとこちらを見やったが、そのまま走り去ってしまった。おっさんの自転車のカゴに入っていた紹興酒のビンがやけに悟の頭の中にこびりついた。こんな危機的状況なのに、なんでそんなどうでもいい物が頭の中にこびりつくのかと悟はいぶかしがった。恐らく正常性バイアスのようなものが働いていたのかもしれない。
「何ボケーっとしてんだよ！」という男の声で悟は我に返った。
　少し落ち着いて男の顔をよく見てみると、一昨日の夜、悟と殴り合いの死闘を演じた、巻島という男だった。
「お前はアレだな？　いい加減な感じがカッコイイ、とか思ってんだろ？」
「はぁ？……いや別に……何です？　何の用……」と言いかけて悟は口をつぐんだ。一昨日の夜の記憶が徐々によみがえってくる。ドロシーから渡された紙には、悟が今日の午前十時に、先生を喫茶店『サヰコ』に呼び出す、と書いてあったのだ。
「やっべ……忘れてた……」
　悟は昨日のバンド練習終了後、先生とハカセが始めた大喧嘩の仲裁をして、その後開かれた仲直りの飲み会でしこたま飲んだりしている内に、その事をすっかり忘れてしまっていたのだ。
「俺はお前みたいなヤツの内蔵が何色かを知りたいよ？」巻島はそう言うと、手にしたナイフをくるっと回転させ、そのまま真上に振り上げた。
　悟のTシャツは正面からまっぷたつになり、アバラの浮いた痩せた上半身があらわになった。悟の首筋に汗が伝う。冷

や汗ってマジに出るんだな、と悟は思った。
「こんなまわりくどい事しないで、ヒットしたほうが早いんだけどさ……所長が依頼人のお望み通りにってうるせーもんだから、こうしてお伺いしたってわけですよ……悟さん」巻島は、全く輝きのない目で悟を見据えてそう言った。
「とりあえず支度しろ、着替えろ、別に今からシナリオどーりにやるんでもいいんだろーからよ……早く準備してターゲット呼び出せ」そう言って巻島は、悟を部屋の中へ追いやると、玄関ドアを後ろ手に閉めた。そして靴のまま部屋に上がり込み、台所を色々物色しながら、灰皿はどこかと悟に尋ねる。悟はまわりを見渡したが、すぐには見当たらなかったので、灰は流しに落としてくれと言った。流しを指差そうとして、コボちゃんを左手に持ちっぱなしであることに気付く。
　悟はコボちゃんを布団の上に放り投げると、先生に電話をかけた。

　悟から「本の打ち合わせをしたい」と連絡を受けた先生は、喫茶店『サヰコ』の一番奥の席にいた。コーラフロートのバニラアイスを食べ終えた頃、悟がやってきた。
「急に呼び出しちゃってすいません」
「ん……別にいいけど、ゴーストライティングの成果をミシてもらえんのかな？」
「あぁ、そっすね、結構書きましたよ……先生っぽいか自信ないんすけどね」
「いや、それが逆にいいんだよ、新たな一面が！　ってなもんで」
「だといいんスけどねェ……」悟はなかなかソファに座ろうとしなかった。視点が定まらず、どこかそわそわしている。不審に思った先生は「どした？　悟？」と聴いた。
　悟の頭の中は、ジャックナイフの刃先で一杯だった。だが微かに残った悟の良心が、悟に囁き続けていた。『先生を逃がせ』と。気がつくと悟は先生の手を取り、店の裏口を抜けていた。巻島の舌打ちは急発進のエンジン音にかき消された。

　悟はとりあえず録朗の住むアパートへ向かう事にした。喫茶店『サヰコ』の周辺路地を知りつくしている悟は、巻島の追走を難なく逃れた。先生は悟に引きずられるように走りながら説明を求めた。悟は「簡単に言えば『ミッドナイト・ラン』的状況です」と言っておいた。先生は「なんだそれ？」というと、後はずっとゼーゼーと呼吸するだけになった。
　さすがに録朗のアパートまではわれていないだろうと悟はふんでいた。しかし念のため、アパートの近くまでくると、録朗に電話をかけた。だが、なかなかでなかった。出ろ！　早く出ろ！　俺の寿命が切れる前に！　プツ……「フー、はい？」唐突に録朗の声がフェード・インしてきた。なんだってこんなブタ野郎の声がこんなに愛おしいんだ？　と思いながら、悟は簡潔かつ明瞭に言った。「部屋の外に誰かいるか？」いないブー、安全だブー、と鳴いて欲しかったが、悟の願いはもろくも崩れ去った。「うん、なんか黒いスーツで、どキンパのヤツがいるなぁ……部屋の中だけど……ブツ……」電話が切れた。すぐに悟の携帯の着信音が鳴った。録朗からだ。「おい！　どうした？　部屋の中だって？」返事は別の男から返ってきた。「あんま面倒かけんなよ？　悟よぉ」巻島は気怠い声で言った。
「ちょっ……録朗は関係ないから……」
「オマエが関係さしたんだろ？　まぁ、それもたった今、断たれたけどよ」
先生は、青ざめたまま硬直している悟から携帯をもぎ取ると、電話口に向かって怒鳴った。
「誰だ？　てめー？　録朗に何した？」
「……もうシナリオなんか、どーでもいいか……」
「何言ってんだ？　誰だよ？」
「わーったよ、うるせーな、音割れて何言ってっかわかんねーよ……俺はアンタの奥さんから依頼受けた殺し屋だよ、うわ！　ダッセー、自分で殺し屋とか名のってるよ俺……」
「依頼を受けた？　何言ってんだ？」
「だから、アンタの奥さんがアンタ殺してくれって、俺に依頼してきたんだよ！」
「……何だ？　金か？」
「いや、金はアンタの奥さんからもらう事になってる、アンタはただ死んでくれりゃあいい」先生は電話を切った。「なんか頭のオカシー野郎が録朗殺しやがった……」先生はそう言って、唾を吐き捨てた。「そんな……わかんないっすよ、確かにアイツはナイフ持ってたけど」そう言うと悟は、フラフラと録朗のアパートに向かって歩き始めた。それを先生が腕をつかんで引き止める。「アイツ？　ナイフ持ってた？　悟、ちゃんと説明しろ、どーいう事だ？　ドロシーから俺を殺せって、依頼受けたとか言ってたぞ？」
「いや……それは、俺だってわけわかんねーっすよ！　一昨日、いきなりドロシーさんが先生殺るって言い出したんすよ……なんかそれでその後、俺に未発表ってことにして詩を書かせるって……」
「何だそりゃ……死んでカリスマになれってか」
「それより、録朗どーにかしないと」
「駄目だ、逃げる。もう殺されてる、あきらめろ」

「！　さっきから……何でわかるんすか？　何か聴いたんすか？　アイツが殺したって言ってたんすか？」
「いや、逆だ。何も聴こえなかったんだよ。気配がゼロだった。頭のオカシークソ野郎の気配ひとつだったんだよ」
「……」悟はしゃがみこんだ。巻島の車がアスファルトを擦る音が聴こえてくる。
「イチのアパート行くか」先生は悟の腕をつかんで引き起こし、そう言った。
「まだ訳がわかんねーけどよ、アイツが俺を殺そうとしてるのはマジらしーからな」
「先生……イチのとこだって危険なんじゃ……」悟はしぼり出すようにそう言った。
「大丈夫だって、あそこはここから結構離れてるし、場所もわれてねーよ」そう言って先生は大通りに向かって走り出した。悟もそれに続いた。
　タクシーをひろって乗り込み、後ろに不吉な黒塗りの車がいない事を確認すると、二人は大きなため息をついた。
「あっちー！　汗だくだよ、しかも久しぶりに走ったから気持ちわりー」先生はシャツの襟をバタバタとさせながら喚いた。悟は黙ったまま、窓の外の商店街を眺めていた。商店街を歩く人々の日常と、自分の日常の違いについて、比較してみようと思ったが、意味のないことだと、悟は考えるのをやめた。

　タクシーは先生からの指示を受け、何度も右折左折をくりかえした。
　イチのアパートに着き、タクシーから降りようとすると、ちょっとした問題が発生した。金が足りなかったのだ。先生は悟を押しのけてタクシーから降りると、指を二本口にくわえ、鳥の鳴き声に似た高い音を出した。一拍おいてアパートの二階のサッシがカラカラと開き、イチがひょこっと顔をだした。
「……先生、どうしたの？」
「いや……タクシーの金が足んねーんだわ……悪いんだけど貸してもらえる？」
「いいよー、待ってて」悟はその光景を見ながら、軽い嫉妬を感じていたが、それは今直面している事態のせいで、少し曖昧なものになっていた。そして悟の頭の中には、親鳥の鳴き声に小鳥が巣から顔を出すイメージが描かれていた。絶対の信頼関係、それが二人の間にはある。俺はそこに後から割り込んだだけだ、と悟は思った。
　イチの部屋に入り一息つくと、先生はあらためて悟に質問した。
「よーし……じゃあ、もう一回ちゃんと説明してくれ」
　悟は一昨日の夜、飲み屋で巻島に会ったところから順を追って説明した。
「こういう事言うのアレですけど、言いづらいんですけど……ドロシーさんって、精神的な、なんか病気じゃないですかね？」
　しばらく沈黙が続いた後、先生が口を開いた。
「……んーまぁ、俺も悪いのかもな……何かそういう兆候はわかってたんだけど、気付かないようにしてたっつーか、ほっといてた感じで。でも、楽しー時は本当楽しいんだ……」
　イチは麦茶の入ったグラスをなめながら、二人の様子を眺めていた。そして思い出したようにキッチンに向かうと、冷蔵庫からビールを取り出し、二人に向かって放り投げた。
「飲めば？　何か良いアイデアでるかもよ？」とイチが言う。先生が小さく笑うのが聴こえた。「自動記述みたいに、自動思考？　……なんてねーか、そんなもん。けど、最近寝る前とかにさぁ、布団のなかで、寝るかぁーってしてる時に、頭のなかでテクノみたいな電子音が、ガーっと鳴る時があんだよなぁ……耳鳴りとも違う感じで、夢のなかで聴く音みたいな……耳鳴りじゃねーと思うのは、自分の意思でいつでもやめられるから、もう聴かねー！　ってすると止まんだよ」先生の顔は、外からの光でくっきりと陰影が刻まれ、実際の年齢よりもずっと老けて見えた。悟が「今、すんげー老け顔になってますよ？」と言うと、先生は笑いながら悟の膝を叩いた。

　ドロシーは巻島と電話でしゃべっていた。
「何？　そう……逃げたの。思ってた以上にバカだったってことね」
「？　アンタじゃなくて悟がよ……今、アンタんとこの事務所にいるんだけどさぁ、この娘も殺しやれるわけ？」と言って、ドロシーは緑川を見た。緑川は事務所に置いてあるラジカセにカセットを突っ込んでいる最中だった。そしてラジカセの再生ボタンを押すと、流れてきた音に合わせ「元々殺しが専門です」と歌うように言った。
ドロシーは「あら、いい声ね。レコードだす？」と言うと、電話口の巻島に「じゃあ二人で追って頂戴。その分のお金はちゃんと払うから」と言った。

「さて……今、俺の両手で掴めている物はどんくらいだ？」巻島はサイドブレーキを引いて、しばらく沈黙した後言った。
「何？」後部座席に座っている緑川が、少し苛立ちながら言った。
「いや、急に自分について考えちまって。だせぇ」巻島はそう言うと、両の手の平で、顔をゆっくりと擦った。
「全然だめ、廃業でしょ、そんな事言ってる時点で。わたし達、いや、わたしにはプランとドゥーしかない。シーはない……チェックはない」
「知ってるか？アンタもいつかはオールドになるんだぜ……」顔を両手で覆ったまま巻島はそう言った。
「そうかもね、あるいはね」そう言って緑川は車を降りた。巻島はゆっくりと五回深呼吸をしてから車のエンジンをかけた。まったくだせぇなぁ、俺って奴は。巻島はそうやって自嘲することで、なんとか萎えた心を奮い立たせようとした。

　その男のメモ帳は、ボールペンで書かれた文字でびっしりとうまっていた。
　日記ではなく、スケジュールをメモしたものでもなかった。ほとんどの内容は一行で完結しており、それぞれの関連性もなかった。その中の数行は、定規で引いたと思われる二本線で消されていた。
　男は、ラクダ色のセカンドバックの中からボロボロの本を取り出し、バッグの上に乗せた。何世代か前の携帯電話の取り扱い説明書だった。その上にメモ帳を広げて置き、しばらく考え込んでいる。
　悟がそのメモ帳をのぞきこんでいることに気付くと、男はガラガラの声で小さく「こらぁ」と言った。
　後ろで煙草を吸っていた先生が「悟、ヨシハルさんの仕事の邪魔すんなよ？　俺たちの隠家ピックアップしてくれてんだから」と言った。
「隠家って……なんか今ちらっと見たら、全然関係無さそうな事書いてありましたけど……靴下は前日の夜、枕元に置いとく、とかなんとか……あっ、そういやこないだ、先生のソロの時のビデオ、テレビで見ましたよ」
「え？　何？　ビデオ？」
「天安門広場に、こうやって寝っころがってるやつ」悟は体を大の字にして言った。
「あぁ、シングル切ったときのプロモか……まだ流れんだ？　あんな古いの」
「ケーブルですけどね」
「MTV？」
「MTVで流れるわけないでしょ、『バーストヘッド』とかいうチャチい音楽チャンネルですよ。でもたまにいいプロモ流したりするんですよね。この前もラモーンズがスパイダーマンのカバーしたやつ流れたし……あの曲すげー好きなんすよ、俺」
「ラモーンズの？」
「いや、先生の天安門のプロモのやつ。あーゆう感じの曲、またやんないんですか？」
「うーん、どうだろ？　あの時はドラムがニックだったからな……だから出来たみたいなとこもあんだよ。今はハカセだからなぁ、確かにいいんだけど、なんかちょっと凶暴さにかけるよな？」
「想像してたほど、カタルシスなかったですしね」
「う～ん……そうだな、最初一発目の音あっいいかな？……いや、やっぱ違うなぁ……みたいな、つーかカタルシスって何？　たまに聞くけど」
「えっ！　いや、そうはっきり聞かれちゃうと、俺もよく意味わかんないで使ってるかな……みたいな……え～！　なんだろ？　自分が想像っつーか、こんな感じかなっていうのが、実際に起こってとか、聞こえたりして『これだ～』って満足するという……違うかな？　でも俺はそんな感じだと思ってます」
「ふ～ん……よくわかんねーや、カタルシスか……カタルシス……鼻カタルとは関係ないよね？」
「それは鼻炎ですね。鼻カタルがなおって鼻がスースーすれば、カタルシス感じるかもしれないですけどね」
「ちょっと、話がどんどん関係ない方向にいってんだけど」と、イチが口をはさんだ。「ごめん。つっこまずにいられなかった。どうぞ、続けて、なかなかテンポよかったよ、お笑いみたいで」
「お笑いか……つーか逃亡者にしては緊張感ねーよな？　俺たち」先生はそう言って短く笑った。
「自分の奥さんに命狙われてんですよ？　殺し屋まで送りこまれて」悟は手を拳銃の形にして、自分のこめかみに当てながら言った。
「あいつ、やっぱ殺し屋なのかな？」先生が煙草に火を点け言う。
「殺し屋で、あんな金髪でいいんですかね？　目立つだろ、仕事しづらくなりそうだけどな」と言って悟は笑った。その時、イチが悟の肩を素早く２回叩いた。
「ねぇ、あそこに止まってる車って、さっきまであったっけ？」イチの視線の先には、見慣れた黒塗りの車が、獲物を狙う黒豹のように身をひそめていた。
「なんでこの公園までわれてんだ？」先生はヨシハルさんからメモ帳の切れ端を受け取ると、代わりに金の入った茶封筒を渡した。そして悟とイチに公園の裏口に向かうよう促した。それに合わせて車もゆっくりと動き出した。
　悟は先程から、巻島の追走に対して意図的なものを感じていた。
捕まえようと思えばいつでも捕まえられるのに、あえてギリギリの所で逃がしているような……そういった精神的苦痛

も含めてのドロシーからの依頼なのかもしれない、と悟は思った。当然先生もそう思っているだろうと確認するように、隣で走っている先生の顔をチラッと見る。
　先生はヨシハルさんからのメモを何度か確認しながら、二人に進行方向を指示する。
　暗くてはっきりとは判らないが、イチは顔に笑みを浮かべているように見える。こいつは別に逃げる必要ねーんだよな……と悟は思った。口の中が血の味がする。
　先生は築十年くらいの雑居ビルを指差し「ここだ」と言った。後ろからは、巻島の車の軽快なエンジン音が聴こえる。
　隠家バレバレじゃねーかと思いながら、悟はビルへと入っていった。しかし本当の隠家は別の場所にあった。
　ビルの中にある男用トイレの床下収納の扉を開けると、そこは地下鉄の駅につながっていた。
　券売機で普通に切符を買って電車に乗り、三つ目の駅で私鉄に乗り換え、五つ目の駅で降りた。
 先程走った時にかいた汗が、悟の体を冷やす。悟は身震いをひとつして、先生に聞いた。「この近くなんですか？」先生はメモを見ながら「もうちょい先」と言った。
　イチは涼しい顔で「ねぇ、コンビニで何か買ってこーよ」と先生に向かって言った。
「まず、場所みっけてからな。俺ら出れねーからイチに買って来てもらうけど」先生はメモで自分の顔を扇ぎながら言った。
「あー……でもしばらく潜伏するなら、スーパーとかで本格的な食材買って来たほうがいいか」イチは後ろを歩いている悟を振り返って言った。
「潜伏って、俺らが犯人みたいな響きだな、別にいいけど」
　先生は何の変哲もないマンションの前で立ち止まり「ここっすねー」と言った。
　エレベーターで最上階に上がる。そこからさらに階段を昇って屋上に出た。テレビドラマに出てくる病院の屋上のように、物干し台がいくつか設置されている。
　洗濯物は、W型に曲げられたハンガーに、上履きが一足ひっかかっているだけだった。その先にプレハブ小屋が見える。どうやらあそこが隠家らしいな、と悟は思った。雰囲気出てるぜ、まったく。
　プレハブ小屋の中は以外と広かった。部屋の奥にはマーシャルのアンプとドラムセットが置いてあった。アンプにはクリーム色のストラトが立てかけてある。
「ロックスターの別荘だわね、ステキ！」イチがふざけた口調でそう言い、部屋の中をバレエの真似事でくるくると回り、ワインレッドのソファにどっかりと腰をおろした。
「ドラムとギターがあるなんて、あんま隠家っぽくないですね」
　冷蔵庫の中身を物色している先生の背中に向かって、悟が話しかける。
「ああ、隠れてんのが嫌んなったら、大音量でこの場所を奴らに教えてやる」
　ビールを悟に差し出しながらそう言うと、先生はニヤっと笑った。悟はその笑い方を見て、ドロシーに似ているなと思った。
「電車乗ってる時にさ、ガス夫にメールして用意させたんだ。ライブ近いし、少しは練習しとかねーとさ」先生はあっという間にビールを飲み干すと、空き缶を軽くつぶして放り投げた。
「ここで練習すんですか？」
「そうだよ。文句あるか、少年」
　先生はギターをアンプにつなげると、ヴェルベットアンダーグラウンドのホワイトライト／ホワイトヒートを弾き始めた。ギターのリフをとちると、先生はギターを置いて、アンプの電源を切った。
　部屋が無音になると、外から雨音が聴こえてきた。いつの間にか雨が降り始めていた。悟は片方だけの上履きのことを思い出した。

「山」という声で悟は目を覚ました。
　プレハブ小屋の玄関ドアの向こうから、女の声が聴こえてくる。もう一度「山」、部屋の中を見回すと、バスドラムの中に詰めてあった毛布にくるまった先生が見える。
　３回目の「山」を聞いた時、悟はそれが部屋に入るときの暗号である事を思い出した。鍵を開け、イチを部屋の中に入れる。「いつのまに寝てた俺？」スーパーのビニール袋を両手に持ったイチは、悟の質問には答えずに、無言で袋のなかの食材を冷蔵庫に詰め始めた。
　玄関ドアが開いたままだったので、悟は一回外を見てから閉めた。ドアを閉めた音に反応して、先生が「うーむ」と言いながら寝返りをうった。
「っていうか、暗号意味ないし」イチはカセットコンロを点火させ言った。
「……？　暗号？　あぁ、そうだ！　こっちが『川』って言ってから開けないといけないんだよな？」悟はイチの冷たい態度にやや焦りながら言った。
「悟のそういうとこ、すっごく萎える……」イチはカセットコンロの上に、乱暴にフライパンをのせる。その音で先生は完璧に覚醒したようで、ゆっくりと起き上がり、まとっていた毛布を適当にバスドラムの中に突っ込んだ。ソファに座り、大きく欠伸をして「パパ、ママ、朝から喧嘩はやめてよ」と子供のような声で言った。
「チョビにさぁ、全身の毛をブリーチしてこいってメールしといたんだけど、してくると思う？」先生が携帯電話をいじくりながら言う。
「え？　チョビさん呼んだんですか？」悟はそう言って、先生の向かいのソファに座る。「ハカセも呼んだ。沼さんも多分来るよ」

　午後３時過ぎにチョビがハスキーな声で「山」と言うのが聴こえた。イチがドアをあけて、「ハァーイ、チョビ」と言った。チョビは無言で、手に持ったベースをやや持ち上げて答える。
「チョビさん、それ雨の時とかどーすんですか？　いつもむき出しで持ち歩いてますけど」悟が尋ねると、それをさえぎって先生が言う「チョビ、お前全身の毛ブリーチして来いっていったろ？」阿呆か、と言いながらチョビがシールドをアンプにさし込む。ブゥーンという低いノイズが一瞬部屋を覆い、パチッという音で消えた。「接触悪い、コレ」チョビが体ごとベースを左右に振る。低いノイズが生まれた場所で体を止め、複雑なリフを弾き始める。その音は分厚く、悟の心臓を数ミリ持ち上げる。
　１時間程前に着いていたハカセと沼は、何本目かの煙草を吸っている。二人の吐き出す煙は、それぞれ違う色に見えると悟は思った。
　沼は眼鏡を外して、シャツの胸ポケットにしまう。元々部屋に置いてあったクリーム色のストラトを一旦手にして、また置き、ギターケースから自分のギターを取り出してアンプにつないだ。
　ハカセは煙草を吸うのをやめ、スティックで頭を掻いている。マイクをつないで先生が「やろかー」と言う。「新曲、沼さんが作ってきたやつ、あれやろー」ハカセがスティックで、カッ、カッ、カッ、カッ、とカウントを入れたその後の一瞬の間が好きだと悟は思う。いつもよりコンマ１秒余分に間を取ってから、沼が手を振り下ろす。
　雨で増水した茶色い川のイメージ、と先生が沼に向かって説明していたのを悟は思い出す。ハカセのドラムはやはり物足りないが、先日のスタジオ練習の時よりかは遥かにマシだ。ドラムとギターが加わると、チョビのリフが複雑ではないことに気付く、というよりかは必然であることが解る。先生が音圧に逆らって「歌詞つけた」と叫ぶ。沼のバカでかいフィードバックで一瞬鼓膜が収縮し、音が遠くなる。悟は何度か唾を飲み込む。先生の歌う声は、ほとんど聞き取れない。
　沼の長いギターソロからジャムセッションに変わり、十分程演奏した後、村八分の『ねたのよい』のカバーに変わって終わった。
「あー……何かいまいちだな」先生が長い髪を振りながら言う。
「そうっすか？　良かったっすよ？」ハカセが眼鏡をずりあげながら言った。
　チョビはため息をつく。沼は帰り支度を始めている。
「沼さん！　帰んないでよ、まだ合わせたい曲あんだから」

先生は冷蔵庫からビールを取り出して沼に駆け寄る。
「何度やってもおんなじだろ？　客はアンタを見に来る、曲は聴いてないよ」白髪まじりの顎髭をジャリジャリとこすりながら沼が言う。
「ライブ明日だから……ちゃんと来てよ？」
　先生の言葉には答えず、沼はプレハブ小屋から出て行った。

　翌日、先生、悟、イチの三人は、プレハブ小屋を出てライブハウスへと向かった。
　悟は、すぐそこの角から巻島の黒塗りの車がスッと出てくる様な気がして、あたりをチラチラと伺っていた。真夏に閉め切った自分のアパートに帰って電気を点けた時、ゴキブリがいるのではないかと、部屋全体を眺めまわすのと同じだと悟は思った。絶対にいるような気もするし、一匹もいないんじゃないかとも思えてくる。そして出て来た時の衝撃！　しかしゴキブリは人を殺さない（もしかしたら過去にそんな恐ろしい事が起こっているかもしれない）が、人は人を殺し得る。
　外は晴れていた。寝坊した時の午前中の明るさだ、と悟は思った。朝と夜にしか通らない、通勤、通学の道を寝坊していつもと少し違う時間帯に通ると、妙な違和感を感じる。まわりは初めて見る風景だが、悟は何故かそんな違和感を感じていた。
　三人は何度か電車を乗り換えて、東京郊外の無人駅に降り立った。そこから歩いて三分程の場所に今日先生が出演するライブハウスがあった。駐車場には何台か車が止まっている。先生はその中の一台に目をとめ、「ニック」とつぶやいた。「ニックもう来てんじゃん！」先生は入り口へと駆けていった。
　悟とイチも中へと入ると、ニックと思われる男と先生がしっかりと抱き合い、お互いの背中をポンポンと叩いている所だった。
「いやーニック！　来てくれると思ったよ！　ありがとね！」
　ハグが終わると今度は握手をして、その手を上下に揺する。ニックはあちこちに穴の空いた白いＴシャツにジーンズというラフな格好をしている。
「マコトに叩けと言われれば、いつでも叩くよ」ニックはそう言って微笑むと、悟とイチに気付き、メンバーか？　と先生に聞いた。先生は首を振ってフレンドだ、と言った。「オー！　ヨロシク！」と握手を求められた悟は手を差し出した。次の瞬間、想像を遥かに超えた圧力が悟の右手を襲った。悟は引き抜くように手を離すと、小声で誰なんすか？　と先生に聞いた。ドラマーだ、と先生は答えた。それは同時にハカセのクビを意味していた。
　ガス夫がスタッフ数名に色々と指示を飛ばし、ステージのセッティングをしている。先生はバーカウンターに座り、ニックに早口で色々と説明している。会話の内容は英語なのでほとんど解らない。悟は所在無さげに煙草に火を点けた。
「ハカセ、クビかぁ……」イチがステージを見ながらぽつりと言う。「かわいそうじゃない？」駄目だと解ってて使い続けるほうがかわいそうだろ、と悟は思ったが「ショックだろうなぁ」と言った。
　ステージでは沼がギターのチェックを始めている。それを見て先生はニックの肩を２回叩き、ステージへ向かうよう促した。
　予定より少し遅れてリハーサルが始まった。ニックのドラムは抜群だった。悟はニックのドラムを聴いて、定時制の高校に通っていた頃の事を思い出した。
　当時付き合っていた彼女が和太鼓部に所属していて、悟は彼女が中庭で練習しているのを見るのが好きだった。
「悟もやれば？」
「いや、俺はいいよ」
「なんでー？　なんも部活入ってないでしょ？　なんかやんなよ」
「いや、いい」
「なんでよ？」
「俺は見てるのが好きなんだ。小学校の頃も友達ん家行って、みんなファミコンやってるのずっと見てんのが好きだったんだ」
「前からっていうか、元々っていうか、悟って暗い」
「暗くなきゃ、灯りは見えないよ」
「なにそれ？　別にかっこ良くないから」
「かっこいいこと言おうとしたわけじゃねーよ」
「じゃ、とりあえず変な事言ったって事で、飲みもん買って来て」
「結局そーなる？」

「当然そーなる！」そう言って彼女は声を出さず笑う。
　悟のそんな甘酸っぱい思い出を蹂躙するように、沼のギターが轟音を上げた。音圧で内蔵が震え、鼓膜がむず痒くなる。悟はそんな轟音に身をさらしていると、体中を洗剤で洗われているようだと思う。
　ニックがスティックを二本駄目にしてリハーサルが終わった。

　フロアにはドロシーがいた。彼女は先生の個人事務所の社長でもあるので、当然と言えば当然だが、今まで考えないようにしていた事を眼前に突きつけられると、悟は少なからず動揺した。まさか衆目が集まるなかで殺しはしないだろう。悟はそう思うことにして、意識を別のところへ向けようと努力した。
「悟さん、こないだのキャバ嬢とアフターいったんすか？」ステージのセッティングが終わったガス夫が、悟に話かける。悟はえ？　と聞き返す。
「向田邦子に似てるって、すげー気に入ってたじゃないすか、どこがいいのか俺にはわかんないですけど、つーかそもそも向田邦子って誰すか？」
「ああ、こないだの……」と言って、悟はバーカウンターでビールを注文しているイチをチラっと見た。「……んー、いや、結局行かなかった。お前が帰った後ちょっと飲んで、先生がもう帰るって言い出したから」イチからビールを受け取り、一口飲んだところで客電が落ちた。数人の客が指笛を鳴らす。
　最初にステージに現れた沼がギターを抱え、続けて出て来たニックに目線を送る。ドラムセットに座ったニックが、フロアを見渡しスティックを４回鳴らす。いつの間にかステージに立っていたチョビが、最初の一音を弾くと、個々の音とリズムが重なり、ずぶ濡れのヒグマが森の中を疾走するような、獰猛でしなやかなグルーヴとなって走り出した。どこかでガラスの割れる音がしたような気がする。
　先生がステージに現れると、客が一気に前に押し寄せ、悟は肩を押されてよろめいた。手に持っていたビールが少しこぼれて床に落ちる。
　しばらくジャムセッションが続く。その間、先生はマイクスタンドに手をかけ、ずっとうつむいている。その様子をドロシーは、フロアの一番後ろの壁にもたれかかりながら見ている。隣には緑川と巻島が立っている。巻島は眉間にしわを寄せて、緑川の耳元で怒鳴る。「どこがいいんすかね？　こんなの」
「だからって、ここで殺っちゃダメだからね」緑川は口元に少し笑みを浮かべながら怒鳴り返す。
「なんか楽しんでないすか？　もしかしてファンですか？」そう言った巻島の腹に、緑川が肘を打ち込む。巻島は体をくの字に曲げる。その拍子に、手にしていたビールが盛大に前方の客にぶちまけられた。前方の客はわりとガタイの良い男で、振り返るとすぐさま巻島につかみかかった。ライブを楽しめよ？　と言って巻島は、男のみぞおちに拳を深く打ち込んだ。男は声もなくその場に崩れ落ちる。異常に気付いた回りの客数人が、二人の様子をチラチラと伺っていたが、しばらくするとバンドの音に戻っていった。
「好きだね、都会の無関心ってヤツ」巻島は煙草に火を点ける。緑川が自分にも、と巻島の肩を小突くので、一本渡し火を点けてやる。
　ようやく先生が歌い出した。マイクに深いリヴァーブとディレイがかかっていて、何を言っているのかはまったく解らない。
　悟は天井と床が逆転したような錯覚に陥る。しかし手にしたビールはこぼれていない。「あれ？」悟の目の焦点は、ステージから少し手前の空気の面に合っていた。異常に気付いたイチが、悟の顔をのぞきこむ。
「どしたの？　大丈夫？　悟」
　悟は手を上げて大丈夫だ、とイチに示す。
　イチ自身も、先程から軽い目眩のようなものを感じていた。悟に大丈夫か？　と言ったのも、半分は自分に対しての問いかけだった。大丈夫か？　私。なんだか殺虫スプレーを天井に吹き付けて、それを思いっきり吸い込んじゃった時の感じに似てるわ。
　その原因は、バンドの演奏によるものだとイチは思った。
　普段の２倍はでかい沼のフィードバックノイズと、和太鼓を思わせるニックのドラムが複雑に絡み合い、脳とあらゆる神経をゆっくりとしめつけていく。
　先生の声は、海の底から吹き出る溶岩のように、放たれてすぐに、自らの残響で熱を奪われていく。
　イチは断続的に意識が遠のくのを感じた。ハッと気付く度に、床に倒れている客の数が増えていった。音量は更に上がっていった。

　頬に冷たいものがふれて、悟は目を開いた。
　イチがビールのはいったグラスを持って、悟の顔をのぞきこんでいる。悟は頬についた水滴をぬぐいながら起き上がった。
　フロアには悟とイチ以外、誰も残っていなかった。
「え？　どうなってんの？」悟は周りを見渡しながら言った。
「途中でぶっ倒れたのよ、すんごい爆音だったからね。私もヤバかったわー、他にも何人か倒れてたけど……っていうかほとんどぶっ倒れてたか……大体の客はライブ終わって、十分くらいしたら起きて帰ってったけど、悟なかなか起きないから、ちょっと焦ってたとこ」
「先生は？」
「なんかドロシーさんとかと出てったけど？」
「バカ！　なんでほっとくんだよ、つーかすぐ起こせよ！」
「何それ？　勝手にぶっ倒れてたくせに、よくいうわ」
「いや、ゴメン……とにかくどこ行ったかわかるか？」
「っていうかマジなの？　ドロシーさんが先生殺そうとしてるって話、なんか見ててそんな感じはしなかったけど……」
「マジだって！　現に録朗が巻き添えくって、殺されてんだぞ」
「え？　録朗なら見に来てたじゃん」
「嘘？……どこらへんにいた？」
「んーと結構前のほう、幽霊には見えなかったなぁ……たっぷり汗かいてたし」
　ふいに悟の携帯電話が鳴った。ドロシーからだった。
「怒らないから、こっちへいらっしゃい」
　ドロシーに指定されたのは、刑事ドラマに出てきそうな廃工場だった。
　悟は何度も帰れと言ったのだが、結局イチもついてきた。
　工場のなかはがらんとしていて、床には割れたガラスの破片があちこちにちらばっていた。赤く錆びた鉄骨に、ドロシーがよりかかって立っている。
「来たわね、お二人さん。いよいよクライマックスよ」芝居がかった口調でドロシーが言う。
「来てやったのよ、あんたのくだらないカリスマごっこにつきあってやるわ」何故かイチがその芝居に乗っかる。悟はまた気を失いそうになったが、なんとかこらえて言った。
「もうやめましょうよ……俺まだ警察とかには言ってないですし、今なら冗談ってことで、先生も許してくれますよ。こんな方法とらなくても本は売れますよ。ササキ・マコトはまだ大丈夫っすよ」
「なーに言ってんのよ……手遅れよ。あんたが一番よく解ってるでしょ？　才能が枯渇したと、飢え苦しむ前に安楽死させてやるのよ……巻島！」
　ドロシーに呼ばれて、巻島と先生が姿を現した。巻島は、後ろ手に縛られた先生の肩をつかみ、床に引き倒す。先生は両足も縛られていて、口にはガムテープが貼ってある。悟は二時間もののサスペンスドラマを見ているような気分になる。急に家に帰りたくなった。こんなとこで何やってんだ？　俺は。
　巻島は、先生の口に貼ってあるガムテープを一気に引き剥がすと、口の中に手を突っ込み、舌を引きずり出した。滑り止めの黄色いゴムが手の平についた軍手をはめているため、グリップが効いているのか、舌は通常の１・２倍くらいの長さに伸びている。先生は顔中にしわをよせ、呻き声を上げる。巻島がナイフを取り出す。
「ちょっと、マジ？」イチが悟の肩をつかむ。つかむ強さから、あんた何とかしなさいよ、男でしょ？　的な感じを受けて悟はちょっとイラっときたが、黙っているわけにもいかないので、ちょっと待てと言おうと思った瞬間、一気に舌が切り落とされた。大量の血が床に落ち、ガラスの破片をぬって広がる。ドロシーが吸っていた煙草を指ではじいて捨てる。それは血だまりに落ちて音をたてて消えた。イチが携帯電話で救急車を呼んでいる。巻島が、これでいいんですかとドロシーに尋ねる。最後までキチっと殺っとかなくていいんですか？
「いいのよ、これで」

　悟は救急車が来るまでの間、床に落ちている先生の舌を眺めていた。頭の中では新しい詩がすでに十編ほど完成している。

〈了〉